

魍呼不在のこと

天地はお茶を一口啜ると溜め息を吐いた。思えば今日はこんな事ばかり繰り返している気がする。チラリと時計に目をやる。間もなく午後十時だ。

「魍呼さん遅いですわねえ」

美星が天地の茶碗にお茶を継ぎ足し、天地に手渡した。あ、どうもと受け取ると、煎茶の香りと共に湯気が天地の頬を撫でた。

「もうじき十時になりますものね」

「はい…」

お茶ばかり飲んでいても仕方ないし、もう休みましよう和美星さんが言ってくれば自分も休む気になるのに…と天地は思っていた。だが、その一方で、布団に入っても、なかなか寝付けないだろうという事も天地には分かっていた。

「昨日からですものね…」

「はあ…」

魍呼の不在は、たいした事ではない。いつも彼女は神出鬼没で、一日天地にくっついているかと思うと、翌日は酒瓶を持って何処かへ行ってしまっている。けれど、昨日から丸二日。魍呼は全く姿を現さない。

「何処かで飲んだっくれているのでしょ」

「魍呼お姉ちゃん、徳利持って出かけるって言ってたよ」

「まあ、死んでないからそんなに心配しなさんな」

とは、阿重霞、砂沙美、鷺羽の言葉である。天地も初めはそう思っていた。魍呼が飲んだくれているのはいつものことだし、魍呼が徳利を持ってフラフラ出掛けるのも毎度のことだ。まさか死んでいるとも勿論、思っていない。ただ、このまま帰って来ない事もあるのではないかという気持ちがなんとなく拭えない。そんな事は無いと思っても、心から消えていかない気持ちに、天地自身どうして良いか分からず、一日中、数分おきに時計を見た、茶を飲んだりして、気持ちを埋めようと虚しい努力をしているのだ。

阿重霞と砂沙美が就寝すると言い、鷺羽も研究室に戻ったのに、美星だけはテレビを見たり、台所からお茶菓子を持ってきたりして、いつまでも居間に居た。そして、今、天地と向かい合って座りながら、雑誌を読んでいる。

「美星さん…寝ないんですか？」

時より欠伸をしている美星の姿に、天地はようやく声をかけた。自分はぼんやりとお茶を啜っているのに、こんな事を聞くのは可笑しいよなと思いつつながら。

「私ですか？私は、大丈夫ですよ」

「でも…」

「大丈夫です。天地さんこそ、お休みになられたら如何ですか。何だかお疲れですよ」

そうかなと思った途端、欠伸が出た。

「ほら。魍呼さんの事は私が待っていますから、お休み下さい」

「えっ」

天地は正直驚いた。今日一日、魍呼の事を待つとも無く待っていたのは天地の心の中のこととで、皆に分かる様な仕事も、行動もしていないつもりだった。それなのに美星は天地が魍呼を待っているのだと分かっている。

「別に俺、魍呼待っている訳じゃありませんよ…」

では何故、ぼんやりとお茶を啜っているのだと、鷲羽が此処に居たら尋ねて来ただろう。

美星にはそんな鋭さはないはずだと思いつつも、天地は焦った。

「あら、私、てつきり、天地さんは魍呼さんを待っていらっしやるんだと思っていました」

「…そうですか」

「ええ。だって、天地さん、今日は妙に落ち着きがありませんでしたし、時計ばかりご覧になっているから」

天地はドキッとした。美星の事を甘く見ていたが、警察官としての観察力は鋭いらしい。

「そんな事は…」

「そうでしたか、では私の勘違いですね」

美星が照れ笑いを天地に向けた。天地もハハと力なく笑った。

「魍呼さんの事、お気にされているのかと…。早とちりしちゃって、恥ずかしいわ」

美星は雑誌を閉じた。

「別に気にしてませんよ。まあ、あいつの事だからそのうち帰ってくると思いますけど…」
菓子を一つ摘んで天地は言った。まるで自分へ言い含めるみたいだと感じた。

「天地さん、先日は違ったでしょう？」

「先日？」

「ほら、阿重霞さんが新聞配達の方と映画に行かれた時…」

ああ、と天地は思い出した。つい先日、阿重霞はアルバイトの新聞配達の少年に誘われて映画を見に行ったのだ。

「あの日は天地さん、ソワソワしていらっしやらなかったし、砂沙美ちゃんに言われてバス停まで迎えに行かれたでしょう」

「そうでしたね…」

「帰宅された阿重霞さんも何だか喜んでいらしたし」

「ええ…」

砂沙美に言われて迎えに行ったら、阿重霞に抱きつかれた。何故行くなど言ってくれなかったのかと責められたりもした。女の子って妙な事を気にするんだなと思ったのだったと、天地は思い返した。

「なのに、今日は時計を何度も見返していらっしやるから。私、魍呼さんの事、心配なさっているのかと思いましたわ」

美星は屈託ない笑顔を天地に向けた。

「天地さんが魘呼さんを待っていらっしやるのなら、一緒に待っていいよかと思いましたけれど、待っていらっしやらないのなら、私も休みますね」

美星は急須と茶碗を台所に運ぶべく立ち上がった。

「あの、美星さん…」

「はい？」

天地はどうしても訊きたかった。

「そんなに俺、魘呼の事、待っている様に見えました？」

「…はい、見えました」

あっさりと言われ、天地は戸惑った。そんなふうに見えていたんだ。という事は、自分で思っている以上に魘呼の事を気にしているという事になるのではないか。いや、あいつはいつでも俺を振りまわすし、何処でもすぐに飛んで行ってしまおうし、自由奔放な性格だし…どちらかというと、迷惑な存在のはずなのに…。天地は自問自答を繰り返した。

「あ、でも、私がそう思っただけで、阿重霞さんや砂沙美ちゃんは、天地さんが魘呼さんを待っているだなんて思っていないと思いますよ」

何を思ったのか、美星は座りなおすと、焦りながら天地に訂正した。

「ホント、私の勘違いですし、阿重霞さん達からはそう見えなかったと思いますし、いやだわ、天地さん、お気になさらないでください」

俯いて考えていた天地は、顔を上げて美星を見た。美星の顔には困ったなど書いてあった。

「俺：知らずに魘呼の事、心配している素振りを見せていたんですね」

「いやですわ、ですから私の勘違い…」

「阿重霞さんの時は、別に何も思わなかったんです。帰ってくると思っていましたし」

「天地さん？」

美星は天地の顔を心配そうに覗き込んだ。

「阿重霞さんは、此処に必ず帰ってくるでしょう。でも…魘呼は、ああいう性格だから、すぐに何処か行ってしまってもおかしくない。美星さん…」

「はい？」

「他に楽しい事を見つけたら、魘呼はそっちへ行ってしまうのではないのでしょうか」

自分の不安的な気持ちだが、言葉に表れた。天地の声は幾分、震えていた。何を莫迦な事を美星に尋ねているんだろうと、天地自身、自分の馬鹿さ加減に恥しくなった。けれど、この気持ちを誰かに聞いてほしいという気持ちの方が勝った。美星は、他の誰よりも、自分の気持ちを温かく受け入れてくれるような気がした。

「…そうですね…」

美星は、真面目な顔をして、考え込んだ。うーんと唸っている。流石に、美星であっても、訊いてはいけなかったのかなと天地は心の中で苦笑いした。莫迦な自分の言葉を心の中で反芻していると、美星が顔を上げ、にっこり微笑んだ。

「でも、帰ってくると思っていますよ」

「……………根拠は？」

「天地さんがいらっしやるからです」

「え？」

美星の言葉が理解できず、天地は訊き返した。

「俺が居るからですか？」

「はい。魍呼さん、天地さんが大好きですもの、天地さんがいらっしやらない所へは行かないと思いますよ」

美星の回答はごく単純なものだったが、単純すぎて、天地は頭を抱えた。果たして、そんなものなのだろうか。幾ら自分が好きとはいえ、宇宙海賊魍呼が、あの大酒飲みで破壊魔の魍呼が、そんな理由で宇宙をあつさり捨ててしまうのだろうか。天地は納得できなかった。

「俺が居たって、関係無いんじゃないですか、」

「天地さん、そんな事言ったら魍呼さん怒りますよ。恋する女の子をあなどってはいけません」

怒った様な顔を見ると、美星はすぐになーんてねつと舌をペロツと出した。その笑顔に天地は幾分癒された。やっぱり、俺はまだまだ女の子というものが分かっているのだから実感した。そして、「恋する女の子」といものと、実際の魍呼が結び付かず、天地は少し可笑しくなった。

「美星さん、ありがとう」

「何がです？」

「俺の話を聞いてくれて。俺、誰かが居なくなること慣れていないんです。小さい時に母親亡くしたからかな…。傍に居る人が居なくなってしまう事が変に恐くて」

天地はぐつと拳を握った。此処で泣いたら、全く以って恥しい。本当に自分が情けなくなる。しかし、美星は柔らかな声で

「大切な人がいなくなったら、誰だってそうですわ。私だってきっとそう思うに違いありませんもの。天地さん、」

「…はい」

「誰かが居なくなること、慣れるなんて悲しいです。それよりも、帰って来ない家族を心配して待つている方が、私は良いと思いますよ。天地さんは間違っていないせんわ」

にっこり微笑む美星に、天地は思わず涙が零れそうになった。いつもドジだとか天然だとか、まぬけだとか阿重霞や魍呼に言われている美星が、自分の気持ちをこんなに素直に受け止めてくれるとは思わなかった。それどころか、彼女の明るい優しさに天地は今、救われた気がした。

「美星さん…ありがとう。そうですよね…それで、良いんですよね」

「はい。それでこそ、天地さんです」

そう言うと、お茶を淹れ変えますねと美星は席を立った。

天地は心の中が温かく満たされ、じんわりとじていた。時刻は間もなく午後十一時になるところだった。

結局、魍呼が帰って来たのは、午前零時を回ってからだった。

「何だよ、誰もあたしを待って無いじゃねえか」

魍呼は梁の上に立つと、ぐるりと居間を見渡した。真つ暗な居間には誰も居ない様に見える。

「ふああ。あら、魍呼さん、お帰りなさい」

呑気な美星の声が聞こえて魍呼は驚いた。美星は居間の机に突っ伏して眠っていたらしい。

「驚かすなよ。お前、こんなところで寝てると風邪引くぞ」

「私だけじゃありませんよ。天地さんも…」

天地と聞いて、魍呼が色めき立った。

「天地？天地も居るのか？」

再びぐるりと見渡すと、ソファーに横たわっている人物を捉えた。

「何だよ、ソファーで眠ってるじゃないか」

「先刻まで起きてたんですよ」

「…なんでお前と二人で此処に居るんだよ」

魍呼が疑いの眼差しを向ける。美星はキョトンと魍呼を見返した。

「なんでって、一緒に待ってたんです」

「誰を？」

「魍呼さんを。私と天地さんで…」

「天地があたしを待ってってくれたのか？」

魍呼は飛び上がって喜ぶと、天地の元へ駆け寄った。

「あ、魍呼さん！駄目ですよ、天地さん起きてしまいますよ」

魍呼が天地に頬ずりするのを見て、美星が止めた。

「ちえっ。せっかく、あたしが帰って来たって天地に伝えたかったのに。まあ良いか、良く寝てるしな」

くすつと笑うと魍呼は天地の頬にちゅつとキスをした。美星はあらまあと思ったが、魍呼は満足そうだった。

「よし、じゃあ、あたしも寝るか。お前もこんな所じゃなくてちゃんと布団で寝ろよ」

魍呼はそう言うと、姿を消してしまった。全く、天地が言った通りの奔放な性格だ。

美星は暫くぼんやりと魍呼が消えた空間を見上げていたが、天地の寝顔を振りかえり、

「天地さん、魍呼さん帰って来て良かったですね」

と静かに言うと、平和そのものの顔で寝ている天地に、そつと毛布を掛けなおしてやるのだった。

